

## 青果用カンショ新品種「沖夢紫」の育成

比嘉絵理奈・金城鉄男・大城徳夫・高袋正明・桐原成元<sup>1)</sup>・仲里富雄<sup>2)</sup>  
 (沖縄県農業試験場園芸支場・<sup>1)</sup> 沖縄県中央卸売支場・<sup>2)</sup> 沖縄県農業試験場)

Erina Higa, Kaneo Kinjo, Norio Oshiro, Masaaki Shimabukuro, Shigemoto Kiriara and Tomio Nakazato :  
 New variety of Sweetpotato "Okiyumemurasaki"

アントシアン含量が高い紅イモ（紫カンショ）は、健康志向の高まりに伴い需要が増加している。県内における青果用紅イモの生産は280haであり、全栽培面積の約95%（2002年度）を占める。従来品種の紅イモは食味は良好であるが、立枯病による品質低下が問題である。立枯病に対して「備瀬」はやや強く商品化率は高いが、「宮農36号」は弱であるため商品化率が低い。また「備瀬」は「宮農36号」の収量は1.8～2.5t/10aである。そこで沖縄県の島尻マージに適応性が高く、立枯病に対する抵抗性が強く、商品化率が高く、多収（2～3t/10a）で、紫色の皮および果肉を持ち、食味の優れた品種の育成を目指し、今回「沖夢紫」を育成した。

## 1. 育成経過

本品種は「備瀬」を母本に、「V4」を父本にして交雑・育成し、1996年に採種、同年に播種・実生養成並びに1次選抜（選抜数/供試数=15/129）を行った。1997年にかずら増殖によって2次選抜（4/15）をし、1998年に3次選抜（1/4）を行った。1999～2002年にかけて導入選抜試験、奨励品種決定試験、焼きイモ用品種選定試験および現地実証試験等合計13試験を実施した。2003年1月に品種登録願し、同年3月に受理され、同年同月には沖縄県の奨励品種に決定した。

## 2. 栽培特性

第1表に「沖夢紫」の特性を示した。草型は‘匍匐型’で草勢は‘やや強’、節・茎色はともに‘緑色’で茎の太さは‘細’。毛茸は‘無’で密腺色は‘緑色’、葉の大きさは‘中’で葉色は‘緑色’、頂葉色も‘緑色’で葉縁が‘紫色’である。諸梗の長さは‘短～中’程度、イモの形状は‘長紡錘形’、イモ皮の色は‘紫色’、果肉の色は‘濃紫色’である。立枯病率は‘18.5%’で、1999～2002年とも「備瀬」と同程度で潰瘍症状の痕は小さく‘やや強’の抵抗性を持つ。

収量は標準品種の「備瀬」と同等以上の2.5～3t/10aが得られる。本品種は春植・夏植・秋植とも適応性が高く、耐暑性や耐寒性を備えている。

## 3. 食味特性

第2表に示すように粉粘度は「備瀬」が‘やや粘’であるのに対し、「沖夢紫」では‘粘’で、繊維は少ない。密度は果肉の粒子が細かく、‘密’となっており、舌触りがなめらかである。ブリックスは「備瀬」の‘5.4’に対し、「沖夢紫」では‘6.4’と1度高く、強い甘みを感じ、評価は‘良～極良’である。

## 4. 栽培上の留意点

本品種は春植・夏植とも収量は高いが、秋植栽培では冬季に肥大時期が遅くなる傾向にあるため、植付は9月末までとし、基肥をやや多めにすることで収量の増加につながる。また「備瀬」は冬作型に条脈が出やすい特徴

を持つが、「沖夢紫」においても冬期および多肥によるつるぼけ等によりイモ肥大が悪い時に出やすい。さらに品質・商品化率を高めるためには、ゾウムシ類や野鼠等の徹底した防除、輪作等による立枯病の回避をすることが重要である。

第1表 栽培特性<sup>a)</sup>

	品 種 名	
	沖夢紫	備瀬
草型	匍匐	匍匐
草勢	やや強	強
節色	緑	濃紫
茎色	緑	濃紫
茎の太さ	細	やや細
茎の毛茸	無	少
密腺色	緑	紫
葉の大きさ	中	中
葉形	波状歯心臓形	短欠刻浅裂
葉色	緑	緑
頂葉色	緑（葉縁紫）	紫
葉脈色	緑	薄紫
諸梗長さ	短～中	短～長
イモ形状	長紡錘	短～長紡錘
イモ皮色	紫	白
イモ肉色	濃紫	紫
立枯病率（%）	18.5	21.0
立枯病抵抗性	やや強	やや強
収量（t/10a）	2.5～3.3	2～2.5

注) a) 2000年～2002年。

第2表 食味特性<sup>a)</sup>

	品 種 名	
	沖夢紫	備瀬
粉粘	粘	やや粘
繊維	少	少
密度	密	やや密
ブリックス <sup>b)</sup>	6.4	5.4
評価	良～極良	やや良～良

注) a) 2000年～2002年。

b) 試料1に対し水3を加え攪拌後、ハンドレフラクトメーターで計測。

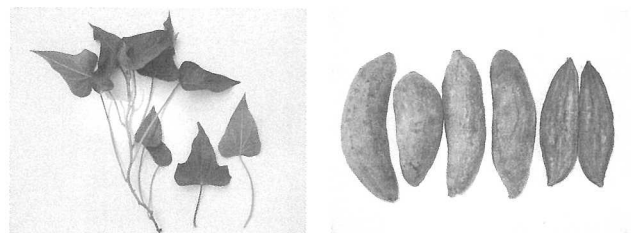


写真1 「沖夢紫」地上部（左）および地下部（右）